

の後、武田信玄を頼つて甲斐国に行き、そこで没したとも、上総に落ち、さらに稲葉一鉄に迎えられて美濃で死んだともいわれている。子・頼次が秀吉を経て家康に仕えて、徳川旗本として家名は存続した。以前の通説では斎藤道三の国取りは一代で成し遂げられたとされていたが、近年の研究で親子二代に亘るものであることが判明している。(近江佐々木氏史料)

尚、頼芸の弟の治頼は分流の常陸江戸崎土岐氏を継いでおり、美濃を追われた頼芸は一時江戸崎(現在の茨城県稲敷市)に身を寄せている。この時に、頼芸が土岐氏の嫡流を譲つたとされるが、その江戸崎土岐氏もまた豊臣秀吉の小田原征伐に際し領地を失い滅亡した。さらに頼芸は上総万喜城(現在の千葉県いすみ市)の分流である土岐為頼を頼つたが、この上総の土岐氏も小田原征伐に際し領地を失い滅亡した。

江戸時代以後

一説では、頼芸は天正十年(1582)まで生きて天寿を全うし、その子・頼次と頼元は旗本として幕府に仕えた。治頼の子孫は紀州徳川家に仕え、徳川吉宗が將軍職

を継いだ時に幕臣となった。

土岐世保家、常陸土岐氏、上総土岐氏については省略させて頂いた。

主要参考文献

『斎藤道三と義龍・龍興 戦国美濃の下克上』横山住雄

戎光祥出版

『岐阜市史』

『朝日日本歴史人物事典』

『戦国史記 斎藤道三』中山義秀(中央公論社)

『国盗り物語』司馬遼太郎

(新潮文庫)

会員研究

平清盛が目指したのは重商主義国家？

齋木敏夫

一 平忠盛(1096~1153)の影響

1108年十三歳で左衛門少尉となり1111年には検非違使を兼ねて、京の治安維持に従事した。1113年には盗賊を追捕した功で従五位下に叙される。伯耆守となり、右馬権頭も兼任した。1120年に越前守に転任し、在任中に昇殿を許された。1127年には従四位下に叙され、備前守となる。さらに左馬権頭を兼任し、1129年海賊追討使に抜擢される。白河法皇が崩御し、鳥羽上皇

が院政を開始すると正四位下に叙された。1132年上皇勅願の観音堂である得長寿院造営の落慶供養に際して千体観音を寄進した。894年に遣唐使が廃止されたが博多を通じて私的に商取引が行われていた。越前の敦賀まで宋船が来航することもあった。越前守在任中に日宋貿易の巨利に目を付け、西国方面への進出を指向するようになったと思われる。鳥羽院の領地肥前の国を管理した際に宋との取引を鴻臚館経由として多額の権益を手にした。この頃瀬戸内

海は海賊の跋扈が大きな問題となっていた。備前守を務めた経験を買われ、忠盛が追討使に任じられる。これを退治した忠盛は降伏した海賊を自らの家人に組織化した。その後、美作守に任じられ1144年には正四位上に叙され尾張守となった。和歌にも通じていた忠盛は崇徳天皇主催の歌会にも参加し、崇徳にも頼りにされる人物だった。1146年受領の最高峰である播磨守に任じられ、1148年四位の最上位者となり、翌年には内蔵頭となった。伊勢平氏で初めて昇殿を許され、北面武士・追討使として白河院政・鳥羽院政の武力的支柱の役割を果たした、諸国の受領を歴任し、日宋貿易にも従事して莫大な富を蓄え、長寿院造営の千体観音を寄進できるほどの財力を有するようになった。このような手法で得た財力と地位は清盛に大きな影響を与えた。

二 現在に残る平清盛(1118年~1181年)の業績

父忠盛が亡くなって平氏棟梁となった。保元の乱で後白河天皇の信頼を得て、平治の乱で最終的に勝利者となり、武士としては初めて太政大臣に任じられた。日宋貿

易によつて財政基盤を整え、宋銭を日本国内で流通させ、通貨経済の基礎を築き、日本初の武家政権を打ち立てた。源氏による平氏打倒の兵が挙がる中、1181年熱病で没し、その後4年で平家も没落した。清盛の人物像は温厚で情深いものだったとも言われている。

① 蓮華王院(三十三間堂)

平治の乱で焼亡した藤原信西宅の跡地を利用して建てられた法住寺殿に後白河上皇は1161年に入り、以後約20年にわたつてここで院政を行った。この地は六波羅の南側にあり、清盛との密接な関係及び彼の武力を頼つていたように思われる。法住寺殿の西側の地に清盛は1165年観音堂と千体観音、五重塔を寄進して蓮華王院が出来上がった。その狙いは自分の出世と妻時子の妹建春門院が後白河法皇の寵愛を受け、憲仁親王を授かり、彼を次期(高倉)天皇にすることであった。1183年木曾義仲の京都侵入によつて法住寺殿は焼失し、奇跡的に観音堂だけが焼け残った。更に鎌倉時代には観音堂も焼失し、1266年に再建されたのが現存の三十三

間堂(国宝)である。現在運慶の長男湛慶が造つた大きな中尊千手観音坐像と多くの仏師により造られた千一体の千手観音立像があり、その内千手観音立像百二十四体が創建時のものである。他に千住観音を護る二十八部衆と風神、雷神像があり、これらの像はすべて国宝となっている。法住寺は後白河上皇の御陵を護る寺として江戸時代末期まで存続、明治期に御陵と寺が分離され現在に到つている。

② 若一神社

清盛の西八条御所の跡にあり、清盛が1166年の熊野詣の際に「土中に隠れたる御神体を世に出し、奉斎せよ。」という御告げあり、帰京の後、邸内を探した所、土中より若一王子の御神体が現れた。そこで社を造つたところ翌年に武士では初めて太政大臣に任ぜられた。という故事に基づき、開運出世の神様として今も尊崇されており、清盛御手植えと伝わる大きな楠木が存在感を示している。

③ 厳島神社 世界遺産

創建は593年と伝わる古社、1168年佐伯景弘が厳島神社を崇敬した平清盛の命を受けて廻廊

で結ばれた海上社殿を造営した。その理由は陸地が神聖な所であったためと海上からの眺めをよくするためであったと思われる。実際に島に人が住むようになったのは鎌倉時代以降であったらしい。平家一門の権勢が増大していくにつれてその名を世に広く知られるようになった。南宋の人たちが瀬戸内海を通り、福原に行く際、宮島の山の稜線が観音の顔に見え、海上には朱塗りの神殿が美しく、感嘆したそうだ。

④ 音戸の瀬戸と大輪田泊

遣唐使が廃止されて以来、博多商人を介して民間貿易が行われていた。交易品を博多から都まで財を運ぶのに手間がかかった。このため音戸の瀬戸を抜け、瀬戸内海航路を整備し、都に近い大輪田泊へ大型船が入港できるように工事を行った。音戸の瀬戸は呉市にある本州と倉橋島の間にある海峡で狭くて急流であり、海の難所であった。しかし厳島神社へ行くためにはここを通るのが近道であった。そこで海峡の幅を拡げ、流れを緩やかにする難工事を1165年にやり遂げたという。工事はあと少しで完成しようとしてい

たが日は沈み観音山の影に隠れた。そこで清盛は山の小岩の上に立ち金扇を広げ「かえせ、もどせ」と叫ぶと日は再び昇り、工事は完成したという「清盛の日招き伝説」が残されており、清盛の死後功績をたたえ、宝篋印塔を建て「清盛塚」とした。本土側の高島台公園には「日招きの清盛像」があり、今も広島の人たちから慕われている。大輪田泊は現在の神戸港の西側に当たり、南東風による風浪が港湾施設を破壊することが多かったため、湊の前面に人工島を築いて安全な碇泊地を設けようと1162年私費を投じて修築工事に着手した。最初の工事は大風の為失敗。1175年に難工事の未完成させ、福原に拠点を造り、交易を通じて第二の都として発展させようとした。現在の神戸港の礎を造り、先見性も高かったことが伺える。

⑤ 民間貿易から国家間貿易へ

当時東アジアの交易船は博多に受け入れ、太宰府によつて国が管理していたが、太宰府高官の不正行為が増加などのため、宋商船は次第に太宰府の管理貿易を避け、不入権をもつ荘園地域の港に

入るようになった。こうして宋船は坊津や神崎のような九州沿岸や京に近い越前・若狭にも進出した。瀬戸内海へは、博多で小型の船に荷を積み換えて移動していたが、遅くとも1180年までには大型の宋船が大輪田泊まで直接やってくるようになった。

主要輸出品硫黄と金

当時の輸出品は金、銀、水銀、硫黄、漆器、木材、刀剣であり、バラストに木材を使った。一方輸入品は香料・薬品類、顔料類、豹皮・虎皮などの皮革類、茶碗などの陶磁器、綾錦などの唐織物類、呉竹・甘竹など笛の材料、書籍、經典、筆墨などの文房具、更にオウム、クジャクなどの鳥獣までが含まれていた。そして宋銭をバラストとした。日本産硫黄の中国への輸出は日宋貿易の開始とともに始まった。中国における火薬は9世紀の中国で発明されたようだ。それは硝石・硫黄・木炭粉を主原料とする黒色火薬であった。これ以後、中国において火薬の武器への利用が進められた。しかし宋には火薬の主要原料である自然硫黄を産出する火山が領域内に殆んどなかった。さらに北方の金の圧

力により、支配領域を狭められた南宋は金の進出に対抗するために武器の火薬が必要でその原料、硫黄が必需品であった。そこでこれに目を付けた清盛は薩摩硫黄島から博多まで硫黄を運ばせ、主要輸出品に仕立て上げた。金は奥州で採掘され、都へ運ばれ、宋へ輸出された。それと共に平泉の金色堂の話も伝わったと思われ、後に来たマルコポーロ(1254年〜1324年)の「黄金の国ジパング」伝説も出来たのであろう。

日宋貿易のきっかけをつかんだ重源と栄西

日宋貿易の糸口をつかむため宋に渡った僧のことが中国の資料に残されている。その僧が重源と翌年明州に入った栄西だ。国交が途絶えていた中国に僧が渡るのは清涼寺釈迦如来立像(国宝)を持ち帰った東大寺の僧胤然(チヨウネン)以来180年ぶりの事であった。栄西が残した「栄西入唐縁起」には中国に渡った二人が天台山に向かったことが記されている。訪れたのは国清寺で重源と栄西はここに数ヶ月滞在したと伝えられ、現地の資料には「栄西大師は1168年仏教を学ぶために来て、帰

る時には仏教の經典六十卷余りを持ち帰られた。」と記されている。清盛は宋王朝との関係を築くために自由な行動が許された僧を利用して。宋の皇帝孝宗が敬った阿育王寺の舍利殿の建設について建築用の木材が日本から運ばれたと記載がある。重源と栄西はこの舍利殿を建立するに際し、日本の最高級の木材を送ることを約束し、連絡を受けた清盛の進言もあり、後白河法皇はすかさず木材を阿育王寺に送り、舍利殿の建立に大きく貢献した。舍利殿を作るという約束を通して孝宗と後白河法皇が接点を持つことになり、正面から中国とつきあえる体制を作り出し、それによつて貿易も盛んにするとうかかなり高等戦略を取った。1170年福原にいた清盛のもとに宋の使者がやつて来て後白河法皇みずからが接見した。当時皇族が異国の人間と接見することはありえないことであり、「玉葉」で九条兼実は「未曾有のことなり」「天魔の仕業か」と記している。清盛は法皇を取り込み、反対する貴族を抑え込み、国家間貿易の基盤を築き上げた。1172年に宋から後白河院と清盛に供物が届けら

れ、翌年答礼の進物が送られた。これ以降、日宋貿易は公的な性格を帯びて本格化して行き、宋銭が国内に大量に流入して、重要な交換手段となった。

⑥ 貨幣経済の生みの親 清盛

708年流通通貨の和同開珎が造られたのを初めとしてその後958年までに皇朝十二銭(日本で製造された十二種類の銅銭の総称)が発行された。しかし発行量が少なく、流通の量を満たすことができず十世紀後半には殆んど流通しなくなつた。平安中期以降は物々交換が主体であった。実際に1176年に運慶が造った円成寺の大日如来坐像の謝礼として「上品八丈の絹四十三疋」を貰ったことが像内に記入されている。船のバラストとして持ち込まれた大量の宋銭の使い方が最初はわからず仏具、銅像の材料となつた。鎌倉時代になつてからであるが鎌倉大仏は宋銭で造立されたそうだ。清盛は寺社の建築や港湾、海路の整備費用として使い始め、徐々にではあるが貨幣として使われるようになり、人々はその利便さが分かるようになった。鎌倉時代初めにはよく流通するようになり、その

後室町時代まで続き、桃山時代から江戸時代になると国産の金貨銀貨を使用するようになった。

三 終わりに

東鑑に「平相国禅門驕奢の余り、朝政を蔑如し、神威を忽緒し、仏法を破滅し、人庶を悩乱す。」と記された如く、驕り高ぶり、朝廷の政治を蔑視し、神や仏も恐れず、人々を悩ました悪者として伝わっている。勝者の歴史で作られた悪人清盛は実際には情け深く、先見の明があり、革新的な人物であったようだ。後世に残る寺社等を残

し、日宋貿易により貨幣経済の基礎を創った偉大な人であろう。歴史上では清盛死後4年で平家は没落し、鎌倉幕府が成立した。東国武士による農本主義が成立し、これが江戸幕府まで続いたがもし平家政権が長続きしたなら貿易を積極的にに行い、貨幣経済を発展させていただろう。後世の足利義満や豊臣秀吉に清盛に類する姿勢が見られたがいずれも長続きせず終わった。もし彼らの政権が長続きしていたなら東洋一の海洋国家になっていたのではないだろうか。

会員研究

『古事記』にはなぜ崩年干支があるか

蛭田喬樹

この稿には初代天皇神武元年が西暦66年であると書いてあります。これは『古事記』と『日本書紀』(以下『書紀』)に書いてあることです。『古事記』は現存する一番古い書物です。和銅五年(712)に完成したと序文に書いてありますが、国史『書紀』には『古

事記』という名前は出てきません。『書紀』には、全天皇の紀年(治世)の他、生まれた年、亡くなった年、お墓(陵)に葬った年、陵の場所、皇后の亡くなった年など、物事の起きた年月日を記していますが、第19代允恭天皇以前の天皇は長生きの方が多く、人間の生

理を超えるとして紀年は信用されていません。たとえば、『書紀』の初代神武武允恭は前660〜後453年の1133年、19代、平均紀年が約59年になります。これに対して第20代安康5第40代持統は455〜697年の245年で21代、平均紀年が約125年になりますから信用されないのもやむを得ないことです。

古事記崩年干支

『書紀』と同じ頃に出来た『古事記』の方は物事の起きた日付は記しませんが、天皇の亡くなった年を干支(十干十二支)で、それも収録する33代天皇のうち15代だけに書いてあります。これが「古事記崩年干支」と言われるものです。この崩年干支は、『書紀』紀年として延長される前の姿ではないかともいわれますが、『古事記』と『書紀』は別の書だとされ、答えは出ていません。

しかし、『古事記』と『書紀』は殆ど同じ時期に出来たのですし、『古事記』の完成日付は序文に記載されているだけです。信頼に欠けるところもあって、『書紀』と『古事記』は一緒に出来た

ことも考えられます。

古事記崩年干支は全体としては飛び飛びに記載されますが、第13代成務から第19代允恭天皇までの7代は連続しています。允恭以前の紀年が延長されているので、これは延長前の紀年が残されたことと見ることが出来ます。また、允恭の後の安康からは飛び飛びになり、紀年が失われたとする説もありますが、天皇の没年という大切な記録が飛び飛びに失われるものではありません。これは、編者が意図的に省略したと考えられます。たとえば、第23代顕宗と第25代武烈には《天の下治らしめすこと八歳》と書いてあります。治世年数は元年から亡くなった年までです。元年は、前帝の亡くなった年の翌年ですから、治世年数を書いてあるのは崩年干支がわかっていたことです。第23代と第25代の治世があると言うことは、お二人の崩年干支、ただでなく、第23代清寧と第24代仁賢の崩年干支がわかっていたことです。第21代雄略と第26代継体の崩年干支は記載されていますから、第21代から第26代までの崩年干支は全部揃っていたことに